

## 【漁況】

### 【マアジ】

#### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

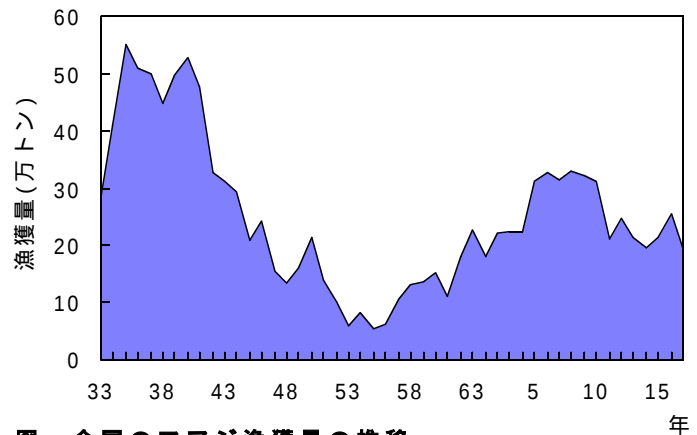


図 全国のマアジ漁獲量の推移

#### 2. 平成19年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、甕島西、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、野間岬沖、開聞沖、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、アジ仔・豆アジ（0歳魚：平成19年生まれ）及び小・中アジ（1・2歳魚：平成18・17年生まれ）主体に345トンの水揚げで、前年の57%及び平年の55%でした。

#### 3. 平成20年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、アジ仔・豆アジ（1歳魚：平成19年生まれ）及びマアジ小・中（2歳魚：平成18年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年、平年を下回ると考えられます。

マアジ2歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年、平年を下回ると考えられます。総合的に判断すると、前年、平年を下回ると考えられます。

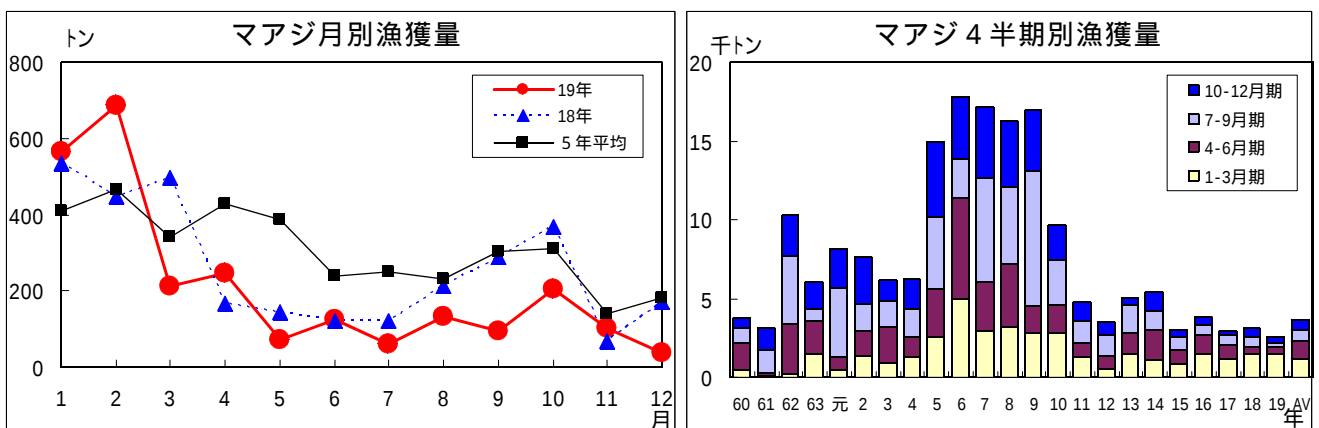


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚げ量を使用。

## [ サバ類 ]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンをピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

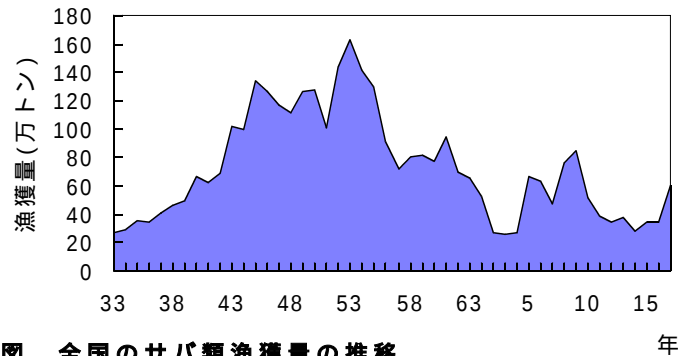


図 全国のサバ類漁獲量の推移

### 2. 平成19年10～12月期の漁況の経過

#### 【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、甑島東、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、島間沖、屋久新曽根に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中(3歳魚：平成16年生まれ)、ゴマサバ豆・小(0歳魚：平成19年生まれ)主体に2,689トンの水揚げで、前年の39%及び平年の64%でした。

### 3. 平成20年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中(4歳魚・3歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体に、ゴマサバ小(1歳魚：平成19年生まれ)、マサバ小(1歳魚・2歳魚：平成19年生まれ・平成18年生まれ)も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ1歳魚、2歳魚は、前期までの漁況から来遊量が低い水準で推移すると考えられます。

ゴマサバ3歳魚、4歳魚は、これまで漁獲の主体となり残存量は減少していると考えられますが、今後も漁獲の主体になる考えられます。

北薩海域では、マサバ1歳魚・2歳魚の来遊が前年並みに期待されます。

総合的に判断して、前年・平年を下回ると考えられます。

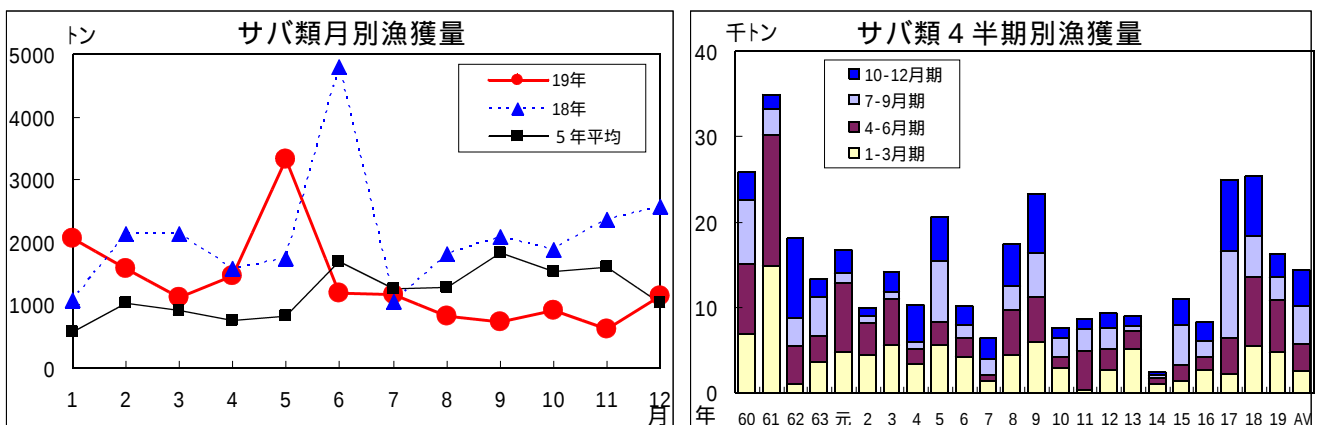


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚げ量を使用。

# [マイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

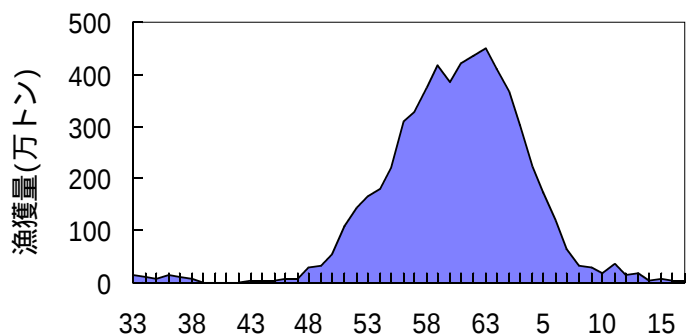


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

年

## 2. 平成19年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中薩南海域においてまとまった来遊が見られ、鹿児島県4港のまき網で1667.0トン(前年比5,840%，平年比29,077%)と前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では0.9トン(前年比749%，平年比3,746%)と、前年・平年とも大きく上回りました。

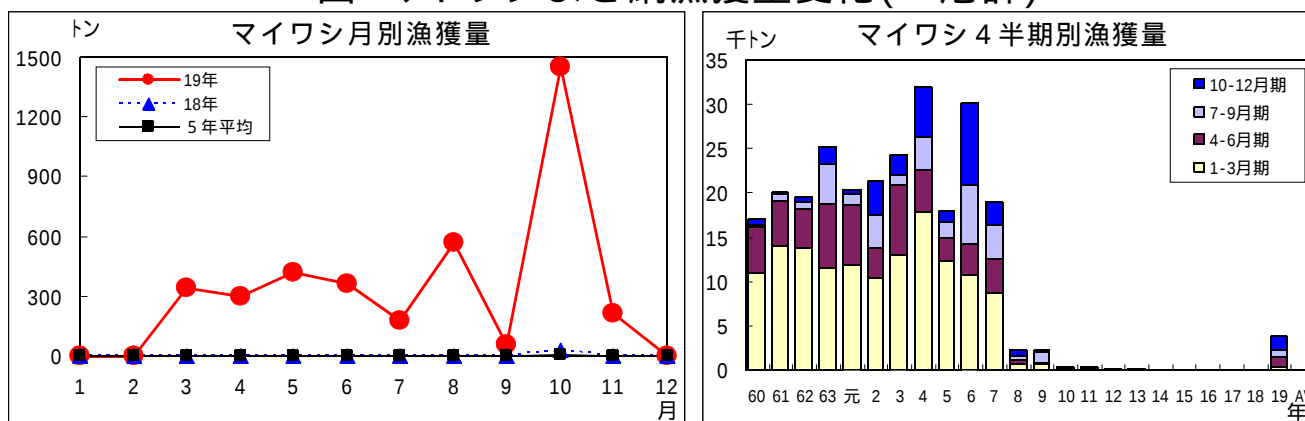
## 3. 平成20年1～3月期の見とおし

まき網、棒受網とも大中羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年並みで平年を上回るでしょう。

（根 拠）

今期に漁獲の主体となる2007年級群の加入量は、平成19年2～8月に漁獲の主体となった2005年級群の加入量と同量程度で、前年並みの来遊量になると思われます。

図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)



平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚量を使用。

## [ ウルメイワシ ]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成17年は3万5千トンでした。

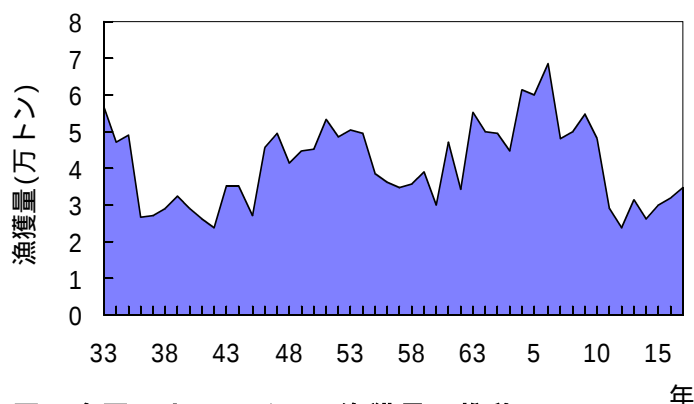


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

### 2. 平成19年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中薩南海域においてまとまった来遊が見られ、鹿児島県4港のまき網で5,155.1トン（前年比1,060％，平年比1,640％）と、前年・平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網では89.5トン（前年比994％，平年比1,068％）と、前年・平年を大きく上回りました。

### 3. 平成20年1～3月期の見とおし

まき網・北薩海域の棒受網とも大中羽銘柄（1歳魚・平成19年生まれ）が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年を下回るものの、平年を上回るでしょう。

（根 拠）

今期の漁獲の主体となる1歳魚（平成19年生まれ）の水揚げが好調に推移しており、来遊水準は高いものの、昭和60年以来過去最高となった平成19年の漁獲量を上回るのは難しいと考えられます。

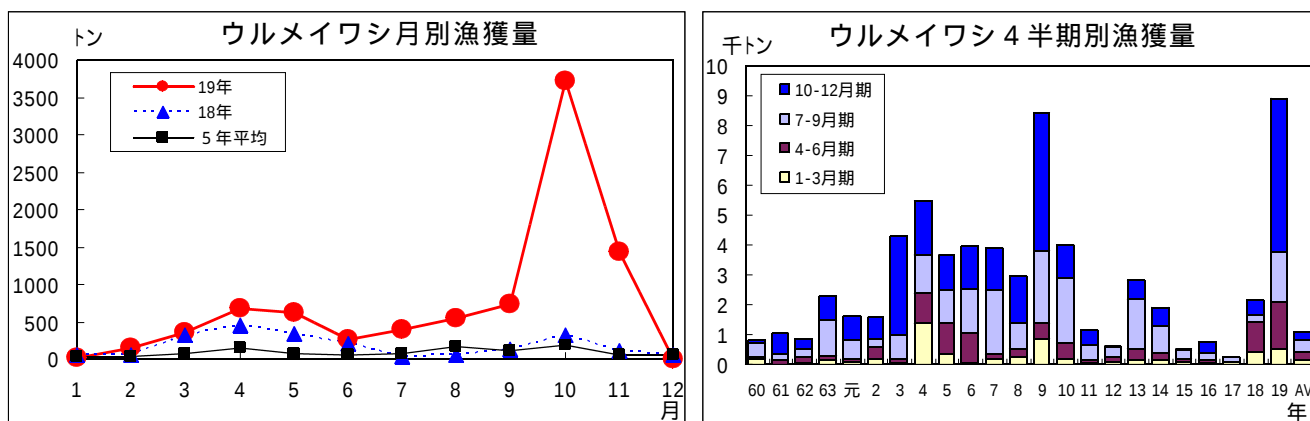


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚量を使用。

## [ カタクチイワシ ]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

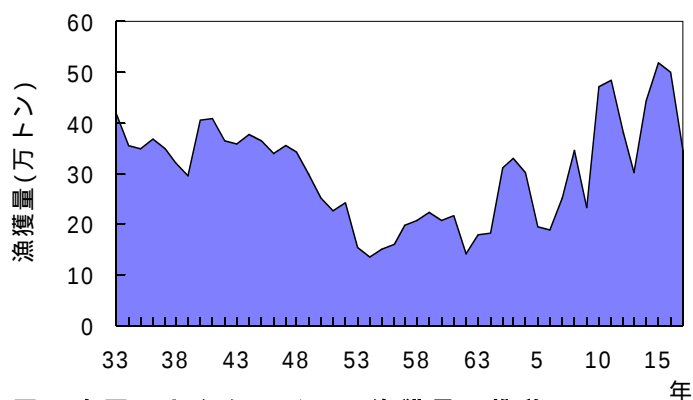


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

### 2. 平成19年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で80.2トン（前年比115％，平年比320％）と前年並みの水揚げで、平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網では14.7トン（前年比11％，平年比19％）の水揚げで、前年・平年を大きく下回りました。

### 3. 平成20年1～3月期の見とおし

大羽銘柄（1歳魚・平成19年生まれ）が漁獲の主体で、前年を下回り、平年並みとなるでしょう。

（根 拠）

対馬暖流系群の資源水準は高いことから、ある程度の来遊が期待されるものと考えられます。

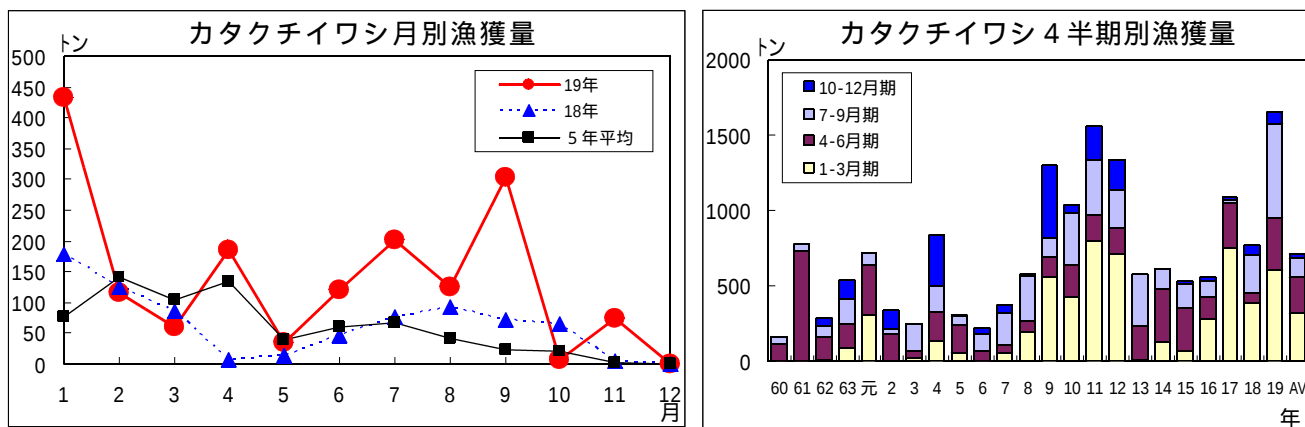


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚量を使用。

## 〔その他の魚種〕

### ムロアジ類（４港計）

#### 1．経年変化及び平成19年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年、14年は一端増加に転じましたが、その後は減少し平成17年は1,675トンとなりました。平成18年は若干増加し2,271トンとなりました。

平成19年10～12月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体のまとまった漁獲があり、期全体では1,857トンの水揚げで、前年の167%及び平年の121%でした。

#### 2．平成20年1～3月期の見とおし

漁獲の主体はクサヤモロ（銀ムロ）で、薩南海域に漁場が形成されるでしょう。

来遊量は前期の漁況経過から、前年を上回り、平年並みになるでしょう。

### オアカムロ（４港計）

#### 1．経年変化及び平成19年10～12月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成18年は1,184トンとなりました。

平成19年10～12月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では154トンの水揚げで前年の90%及び平年の36%でした。

#### 2．平成20年1～3月期の見とおし

来遊量は前期の漁況経過から、前年並みで、平年を下回るでしょう。

### マルアジ（アオアジ）（４港計）

#### 1．経年変化及び平成19年10～12月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。平成16年以降は大きく減少し、平成18年は252トンでした。

主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では81トンの水揚げで、前年の220%及び平年の16%でした。

#### 2．平成20年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ中・大（2歳以上）で、マルアジ豆（1歳魚：平成19年生まれ）も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年並みで、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

前期までの漁況経過から、マルアジ中・大（2歳魚以上）の来遊量は、前年を並みで、平年を下回る水準です。

マルアジ豆（1歳魚）は、12月までの漁況経過から、来遊量は低調であった前年を上回り、平年を下回る水準です。

総合的に判断して、前年並みで、平年を下回ると考えられます。

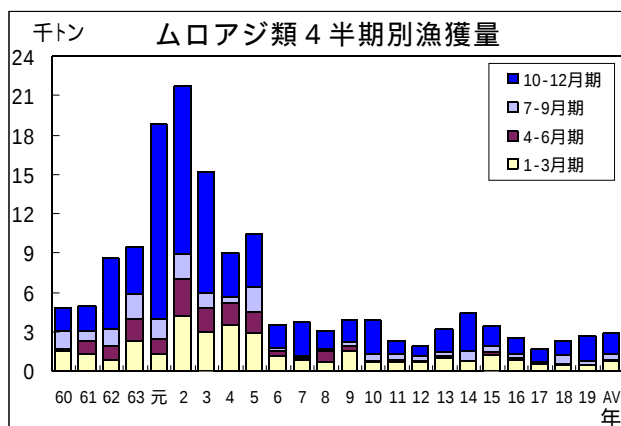
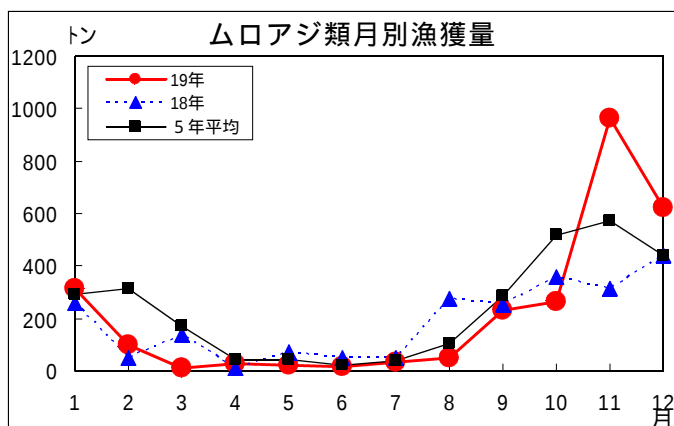


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

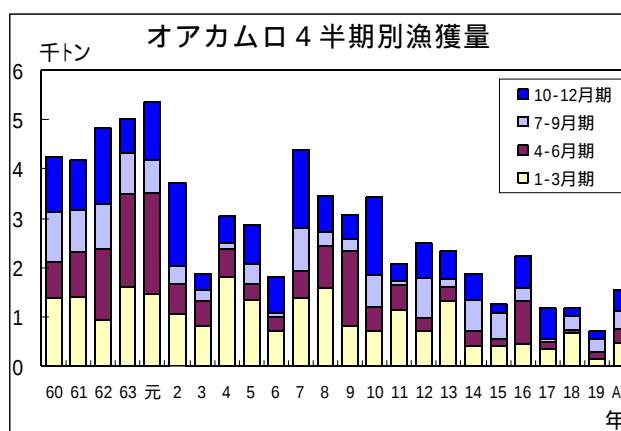
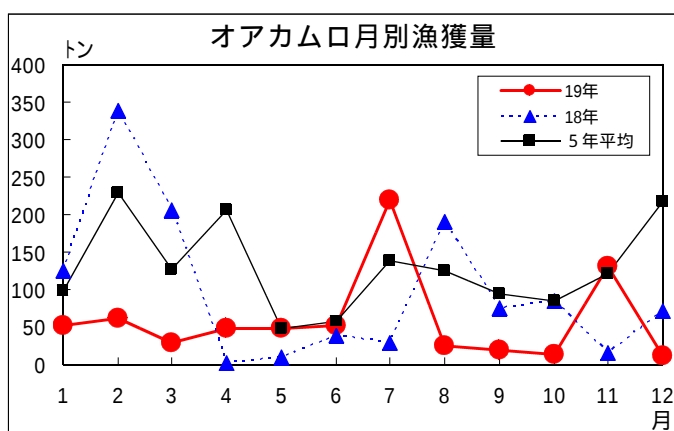


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

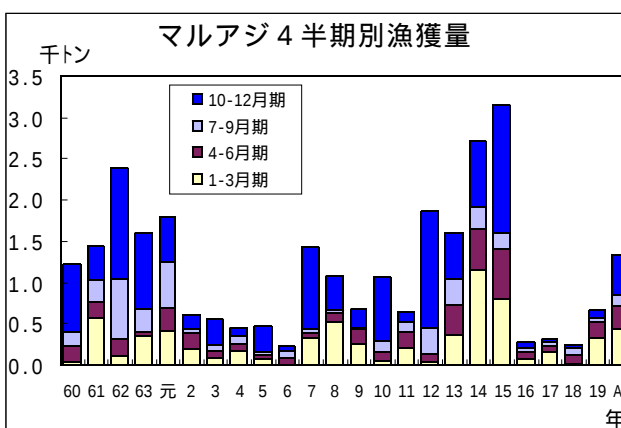
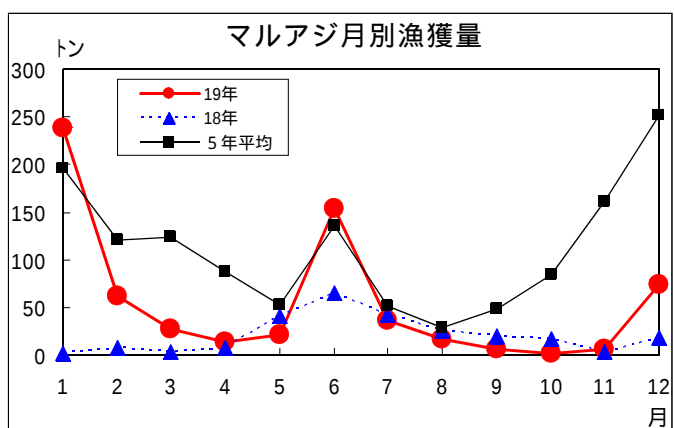


図 マルアジ(アオアジ)まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成14~18年)の平均値,平成19年12月19日までの水揚量を使用。

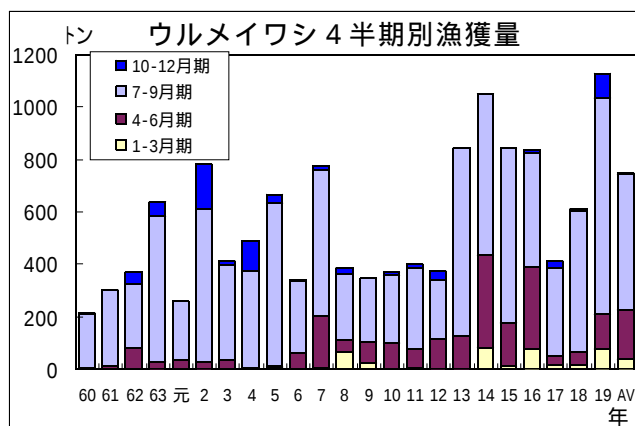
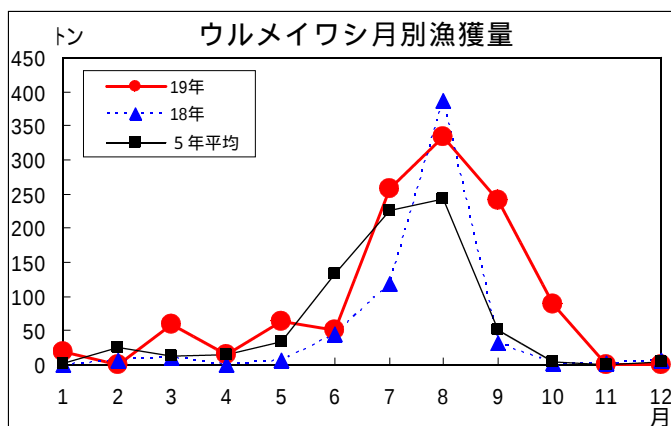


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

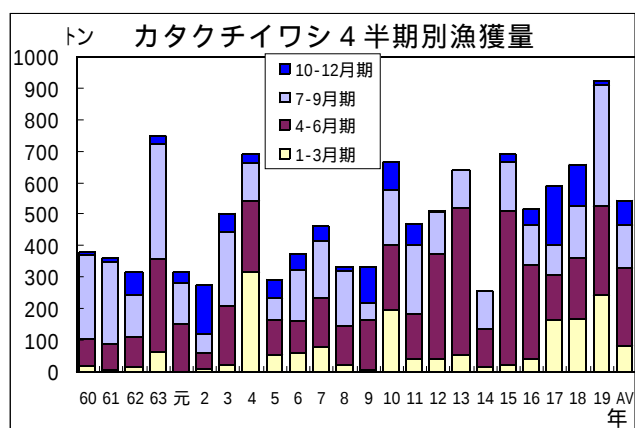
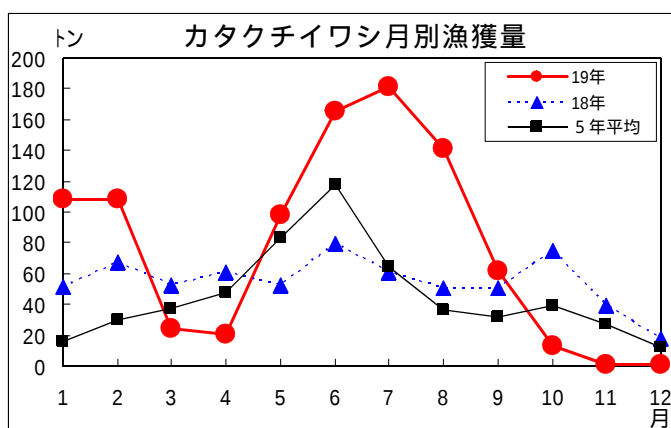


図 カタクチワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

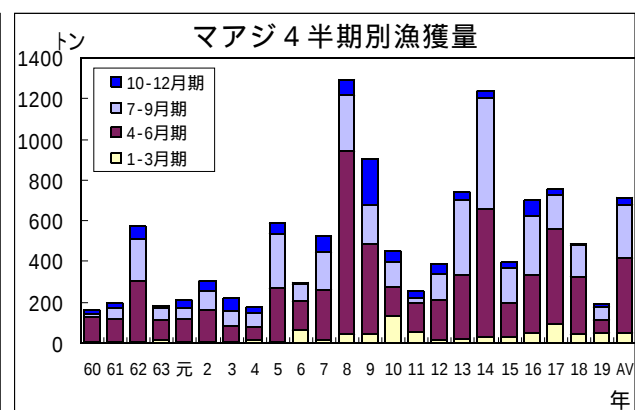
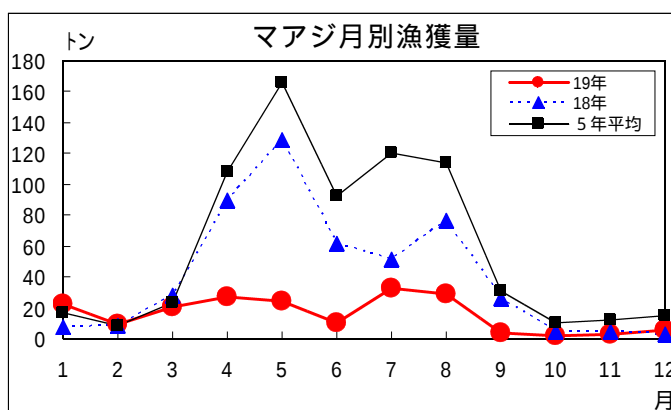


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年12月19日までの水揚量を使用。

## [ シラス ]

経年経過及び平成19年10～11月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トン进行減少傾向を示し、平成14、15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トン、平成17年は3,368トンと比較的好調に推移しましたが、平成18年は2,842トンと若干減少しました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トン进行減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年は842トン、平成16年は1,180トン、平成17年は1,147トンと増加傾向を示し、平成18年は1,444トンと好調に推移しました。

今期の西薩海域では、カタクチシラス主体に317.6トンの水揚げで、前年の116%、平年の55.9%と前年を上回ったものの平年を下回り、低調に推移しました。志布志湾海域では、カタクチシラス主体に598.8トンの水揚げで、前年の1,011%、平年の292%と前年・平年を大きく上回り、好調に推移しました。

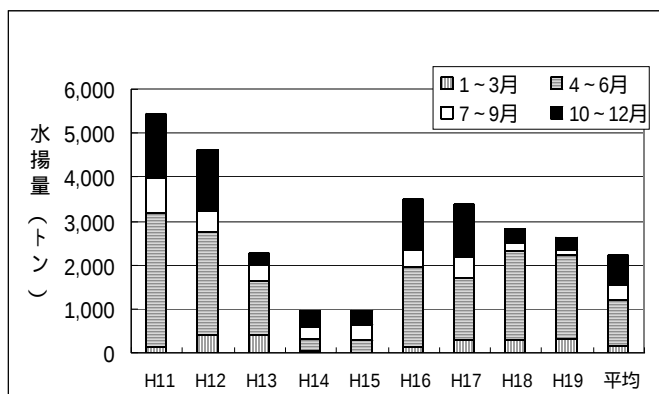
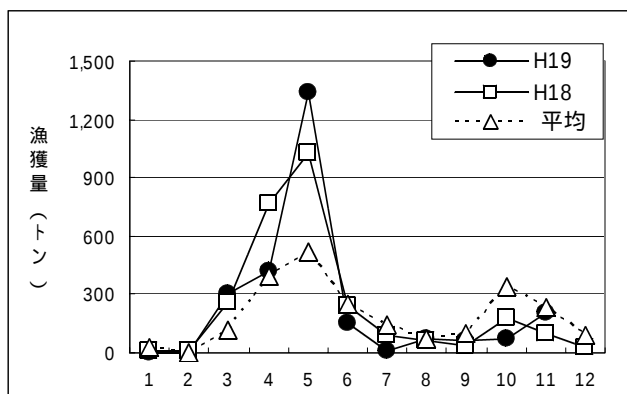


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

平成19年11月末までの水揚げ量を使用。

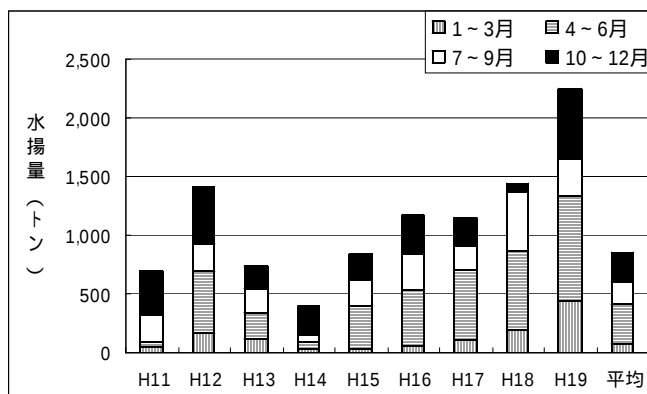
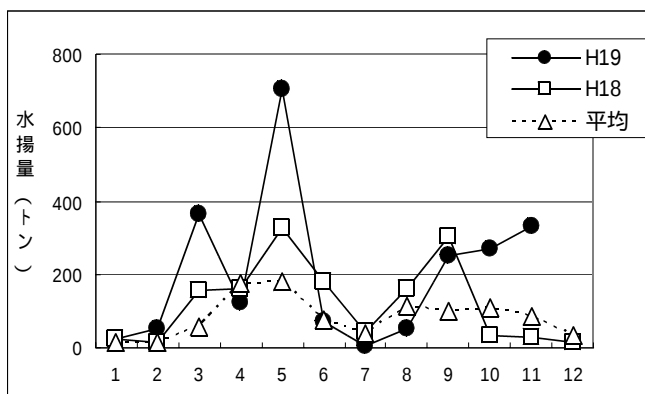


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

平成19年11月末までの水揚げ量を使用。